

二〇二二年度 健康保育学科総合型選抜試験問題

小論文問題用紙

〔設問〕 次の文章は、幼稚園で五歳児クラス（すみれ組、一五名）を担当するD先生の実践記録です。実践記録を読んで、次の設問に答えてください。

- (A) クラスの子どもたちがそれぞれ別の遊びに移っていったのはなぜだと思いますか。子どもたちの心の変化を踏まえて、二〇〇字以内で述べてください。
- (B) この実践記録のように、子どもは様々な姿を見せる存在です。あなたは子どもをどのように捉えていますか。あなたの経験を踏まえて、自身の考えを四〇〇字以内で述べてください。

【五歳児六月の保育実践：動物園の思い出を遊びに】

六月のある日、五歳児すみれ組は遠足で動物園に出かけた。天候にも恵まれ、子どもたちはゾウの長い鼻に目を見張り、キリンの長い首に驚きの声をあげ、木の上を軽やかに飛び跳ね回るサルの姿に心を奪われ、ライオンの堂々としたたてがみに憧れのまなざしを向けていた。帰りのバスの中では「また来たいね」「ゾウの鼻ってホースみたいだったー」と、動物の話が尽きなかった。

翌日、D先生は、子どもたちが動物園のイメージを持って遊び始めることを願って、登園前に保育室の一角を「動物ゾーン」にするために整えた。茶色と緑の布を使って天井からつるしたつる草のような飾りを作り、柵の上には折り紙や空き箱で作った動物たちを配置し床にはダンボールで作った「探検バス」を置いた。また、昨日の動物園でもらってきたパンフレットや動物の写真を数冊の図鑑と並べて置いておいた。

登園してきたリオがまず「うわっ、なにこれジャングル？」と笑いながら声をあげた。リオに呼ばれて、続々と子どもたちが集まってくる。「あ、ゾウ！」「サルもいる！」「昨日、ライオンいたよね」と、それぞれが思い出したことを口にしなが、柵の上の動物たちを見つけていく。D先生はすかさず「よく見つけたね！じゃあ、今日は動物たちをどうやって並べるか、一緒に考えてみようか？」と話しかける。子どもたちは「うん！」と答え、楽しそうに動物たちを見ながら考え始める中、D先生は「ゾウは右側に置くといいかな？だってゾウって大きいから、中央にいると目立つよね」と、少しずつ意見を出し始める。すると、ユウマが「バスに乗ってまた行こうよ！」と探検バスに見立てたイスに飛び乗り、「しゅっばーっ！」と大きな声を出した。そのあとを追うようにしてユイとカナがバスに乗り込む。「ここがサバンナです」「キリンがこっちにいます！」と、ユイがパンフレットを開いて読み上げながらガイド役を始めた。カナは「キリンが首をのびして木の葉っぱ食べてる！」と、その場でポーズをつける。D先生が「カナちゃん、キリンはもっとうちやうって首をぐーっ」と伸ばして、ゆっくり食べる感じなんだよ」と、実際に首を伸ばす動作を大きく示してみせると、カナは一瞬「えっ？」という表情を浮かべたが、すぐにうなずいた。

製作コーナーでは、シヨウが図鑑を眺めながらライオンとカバの製作を始めていた。D先生は「ライオンはたてがみが大事よね。毛糸を使ってごらん」と声をかけ、引き出しから材料を手渡した。しかしながら、シヨウはその材料を受け取った後、「カバってこんなに口大きいんだね」と口の開いた形を意識してハサミを使っていた。一方、オオは別の図鑑をしつと見つめ、「クジャク、ぜったいこれ見た。動かなかつたやつ」と小さくつぶやくと、真剣な顔でクジャクの製作を始める。その姿に気づいたコウタが「それ何？」と寄ってきて、一緒にいろいろな色紙を使って作業を始めた。

部屋の片隅では、チサトとハルキが段ボールバスの後部にクッションを並べ、「ここ、動物園のレストランにしよう」と言いつて遊び始めた。「じゃあ、メニューは何にする？動物に関する料理にしようか？」とD先生が提案する。ハルキが「カレーとジュースあります」と言えば、チサトは「ゾウカレーください！」と笑つて応じる。ままごと遊びと動物園こつこつが混ざりなが

ら展開していった。そんな中、サトルとレンはバスの横で「ライオンがサルをおそってきたー」と叫び、空き箱を武器に戦いごっこを始めた。それに気づいたD先生は、「あれ？サルさん、どうするのかな？木にのぼって逃げちゃう？」とそつと声をかける。サトルは少し考え、「サル、木にのぼったー！ライオン見てるだけだよ」と言いながら柵の上にサルを置いた。レンも「じゃあライオン、おなかすいてなかったんだー」と展開を変えていった。

しかし、少しずつ遊びの雰囲気が変化していく。一部の子どもは、製作を終えると「もういいや」と言つて、積み木コーナーやブロック遊びへと移っていく。コウタはクシヤクを柵に飾ったあと、すぐにサッカーボールを持って園庭に行ってしまった。シヨウも完成した作品をD先生に見せると、友だちの誘いに乗ってブロック遊びを始めた。ままごごとに移ったチサトとハルキは、次第に「アイス屋さん」に遊びが変わり、動物園の要素は消えていった。バスの中ではまだガイドごっこを続けている子もいたが、次第に反応が少なくなっていく。

しばらくすると、D先生の期待に反して、次第に多くの子どもたちが普段の遊びに戻り始めた。最初は動物園のイメージが共有され、みんなでごっこ遊びや製作へと広がりを見せたものの、その遊びが長く続くことはなかった。